会報 第15号

May 2010 Japan Association for Language Policy Newsletter No.15

グローバルゼーションと言語アイデンティティー

橘 好 碩 (國學院大學、日本語政策学会副会長)

本学会第12回大会の大会テーマは「多文化・多言語社会の到来—多言語教育の回避?」である。シンポジウムではEUの複言語主義教育についても多面的に論議されるが、2009年に発効したリスボン条約に基づいて同年11月19日にはベルギー首相ヘルマン・ファン・ロンパウ (Herman Van Rompuy) を初代大統領に選んだEUは、新体制の下で総合的に統合の拡大深化を進めて行こうとしている。地球時代とも言われる21世紀は、国際社会の現状を見るまでもなく、一方では統合と総合化、他方では個別化と相対化という相反する潮流が同時進行する時代である。すなわち、グローバルゼーションの進展と共に、これまで経験したことのない多文化・多言語社会に否応なく対応せざるを得ない時代を迎えるわけである。

この多文化・多言語社会というのは、ヨーロッパが歴史的に何百年も実体験して来たことであり、度重なる戦乱の要因を醸成して来たヨーロッパ特有の社会環境であり、逆説的な表現になるが、それがまたヨーロッパ固有のダイナミズムをもたらしているのである。今日までさまざまな困難を凌駕して成立した超国家ヨーロッパ連合EUは、21世紀の地球社会におけるポスト国民国家時代の国家の在り方のモデルケースを提示しているといえる。

ヨーロッパには、一般に概算して約60の言語と文化があるとされている。歴史的に見て、多文化・多言語に関しては社会的問題、時には、政治的問題として繰り返し何度も対処し解決を計って来たはずである。ところが、これまで外在していたこの問題は、EUとして一体となったヨーロッパでは、当然のことながら、内在化して民族と文化を尊重すればするほど扱いが容易ならざるものになってしまっている。マイナーな言語文化とその担い手ほど、それまでの国家の軋轢排除のためにもEU統合に

大賛成であったからである。問題をさらに複雑にしたのは、2004年5月の中・東欧8カ国と地中海の2カ国の加盟、及び2007年のブルガリア、ルーマニアの加盟に見られるEU自体の東方への拡大である。紺地にサークルを形成して並ぶ12個の黄金の星は、原加盟国の数を表すだけではなく、欠けることのない完全と統一ならびにEU市民の連帯と調和を象徴しているとされているが、拡大EUは、ヨーロッパのアイデンティティーの多様性のみならず言語と文化のアイデンティティーの多様性にもどのように対処して行くのか、という大きな難題を抱えることになった。

EUの公用語は、東方拡大に伴って増大し、23言語になった。加盟国(現在全27カ国)の国語・公用語は原則として公用語になっている。そのため翻訳・通訳に莫大な費用がかかっている。何故これだけの公用語を使用するのか、何故「英語」を共通公用語にしないのか、それはEU自体が、何よりも自らの言語と文化の多様性を自負し尊重しているが故である。国境なき共同体EUが抱える自己矛盾的コンセプトが、域内における国家間関係である。EUの旗に示されているような緊密に連繋したヨーロッパを形成して行くのに、いまだに国家という単位を実質的に超越できないでいるところに、大きな問題が内在しているのである。しかし、目下、統合の成果として、例えば、カタルーニア語圏のように、国家の枠組みを超えて文化と言語によるアイデンティティーを育てて来た「地域」による連帯の動きがいくつも出て来ている。

加盟国の増加と共に、英語の使用率も実質的に増加して来ているが、特に世界語としての英語についていえることは、グローバルゼーションと並行してクリオリゼーションもまた一層進行していることも忘れてはならない。

観光と言語

山川和彦（麗澤大学）

マレーシアを代表するリゾート地のひとつペナン島。ビーチエリアに宿泊したが、「こんにちは」「社長さん」…と声をかけられる。よくもまあ日本人と見抜くものだ。ホテル、屋台、タクシー、コンビニでは、大方英語が通じるので、旅行者にはありがたい。しかし、滞在2日目、「こんにちは」にあたるマレー語でさえ知らない自分がいた。観光という産業においては、ホストからゲストへの歩み寄りがよいサービスと考えられることが多い。旅行者は「お客さん」のまま帰宅し、あそこはよかった、という話をするようになるのである。ビーチ周辺では、アラビア語が併記されている看板が目についた。同じイスラム教圏に属することもあってか、時期によってはアラブ諸国からのツーリストが多いという。滞在3日目、ペナンの市街地、ジョージタウンに宿を移すと、ビーチほど英語が通じない。看板には中国系、インド系の文字が目立つ。同じ島内でもエリアによって言語事情は異なる。

ペナン島から北北西へ350キロ、国境を越えタイに入るとプーケット島がある。ペナンもプーケットもアンダマン海に浮かぶ島である。社会事情が異なるので、一概に比較はできないが、目に飛び込んでくる文字は圧倒的にタイ文字。自然環境は類似していても、国境を越えると言語景観が異なる。

ところで、観光客が多い地域では、往々に言語は「飯」に直結する。教養で語学を学んだという話はあまり出てこない。プーケットの旅行会社で聞いた話では、近年、ロシア語を話すタイ人ガイドが増えたという。ロシアからの富裕層を案内することで、土産店のコミッションが格段に多いらしい。一時は日本語を学んだガイドも、モスクワに半年行き、ロシア語に転向したという。また、ガイドは移動もするそうだ。プーケットは10月

から3月にかけてハイシーズンとなる。一方、タイの東側は季節感が逆。旅行者の動向に合わせてガイドも移動する。旅行者が少なくなれば店は休業する。あるテラーのオーナーは、妙に英語がうまかった。聞くとミャンマーからの出稼ぎ労働者。ハイシーズンだけタイに来るそうだ。

日本に話を移そう。オーストラリア人が急増した北海道ニセコ地域では、近年シンガポールなどアジアからのスキー客が急増している。英語が通じることもその背景にはあるようだ。現地では話を聞くと、英語のできる日本人や元ALT外国人がスキーシーズンに移動してくるそうだ。英語だけの看板も目にする。

日本人観光客の減少の中で、外国人観光客が地域経済に貢献している。訪日外国人旅行者を増やす試み、ビジット・ジャパン・キャンペーン（VJC）は、2003年に始まった国策である。その施策の中には、交通機関の外国語併記、外国語による観光案内板の整備、地域に限定した通訳試験の導入など言語に関するものがいくつもある。観光と言語の関連を調べていくと、地域それぞれにいろいろな工夫をしていることがわかってきた。観光客と地域住民の協働により地域のイメージが形成されていく。企業が社会責任（CSR）を持つのと同様に、地域社会も社会責任を持っているように思われる。観光というと自然や町並み保護などがすぐにイメージされるかもしれないが、実は言語政策も大いに関係している。

関東研究例会・関西研究例会のお知らせ

日本言語政策学会では、言語政策に関心を寄せる方々の有益な意見交換と議論の場として、2005年より関東研究例会を実施しております。2007年からは関西研究例会も発足し、ますます充実した情報共有と議論の場となっております。これからも、より多くの方々にご参加いただける、魅力的な企画に取り組んで参ります。皆様のご来場を、心よりお待ちしております。

関東研究例会の報告・予定(敬称略)

(2009年度報告)

1月30日：「ソ連解体後のバルト三国における言語政策について」ポダルコ・ピョートル(青山学院大学)

2月27日：「揺れ動くガーナの言語教育政策」山本忠行(創価大学)

(2010年度予定)

2010年度の関東研究例会は、「マイノリティ言語をめぐる言語政策：展望と課題」を共通テーマとして掲げます。ユネスコによる危機言語の再活性化プロジェクト、日本における手話の普及、中国における民族マイノリティ言語をめぐる取り組みと、幅広く議題を取り上げ、最新の言語政策の取り組みをご紹介します。また、関連テーマに取り組む大学院生の研究成果をカジュアルに発表する場もご用意いたします。言語的多様性の重要性と実現可能性について、改めて考える機会となれば幸いです。

第1回 4月24日：「欧州の社会統合政策に見る言語と文化—トルコ系移民を中心に—」丸山英樹(国立教育政策研究所)

第2回 9月25日：「日本手話の多様性と標準化を考える(仮題)」大杉豊(筑波技術大学)

*手話通訳がつかます。

第3回 12月18日大学院生数名(調整中)若手研究者の研究成果発表

*詳細が決まり次第、学会ホームページに掲載いたします。

第4回 2月26日：「中国の少数民族政策と朝鮮族(仮題)」李守(昭和女子大学)

関東研究例会

日時：第4土曜日(原則) 午後3時～5時
変更する場合がございますので、詳しいことは以下の学会HPでご確認ください。

<http://homepage2.nifty.com/JALP/>

場所：麗澤大学東京研究センター
(東京メトロ丸の内線西新宿駅すぐ。新宿駅西口より徒歩8分)

東京都新宿区西新宿6-5-1 新宿アイランドタワー4階4104号室 TEL:03-5323-6196

参加費：非会員200円(資料代を含む)、会員無料

*各回とも事前の参加申込は不要です。どなたでもご参加いただけます。

第7回関西研究例会(報告)

2010年1月23日(土)14:00-17:00 於 キャンパスプラザ京都 京都大学サテライト講習室

「在日コリアンをめぐる言語状況—歴史から未来を学ぶ—」中島智子(プール学院大学)

「国語科の新旧学習指導要領について」棚橋尚子(奈良教育大学)

特別大会(名古屋外国語大学共催)報告

2009年11月21日(土)に「国家戦略としての言語政策を考える」をテーマに名古屋外国語大学で開かれました。参加者は41名でした。また大会に先立ち臨時総会が開かれました。

研究例会案内

日本言語政策学会では年次大会、地区大会等以外に関東研究例会と関西研究例会を実施しています。発表希望の方は①氏名、②所属、③専門分野(関心領域)、④題目、⑤概要(200字程度)、⑥連絡先、⑦発表希望月を明記の上、発表希望月の2ヶ月前までに、下記へ申し込んでください。

関東研究例会：JALP事務局

(jalp.waseda.staff@gmail.com)

関西研究例会：西山教行(京都大学)

(jnn@lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp)

第12回 日本言語政策学会大会

大会テーマ：「多文化・多言語社会の到来—多言語教育の回避？」

—「国家戦略としての言語政策を考える(2)」—

日時：2010年6月19日(土) 13:00 - 17:30、
6月20日(日) 10:00 - 17:00

会場：関西大学千里山キャンパス(大阪府吹田市)
交通アクセス、キャンパスマップは大学のwebサイトを
ご覧ください。

参加費：会員無料、非会員 3000円(非会員の大学院生
1500円) 予稿集代 500円

6月19日(土) 12:00 ~ 受付開始

【尚文館1階 マルチメディア大教室】

総合司会 杉谷眞佐子(日本言語政策学会副会長)

13:00 ~ 13:15 開会の辞 田中慎也

(日本言語政策学会会長)

会場校挨拶 市原靖久(関西大学副学長)

13:15 ~ 14:15 基調講演 Henny Rönneper(ヘニー・
レネパー)(ドイツ、ノルトライン・ヴェストファー
レン州(NRW)文部省 外国語教育担当官)

「CEFRにおける新しい能力概念—ヨーロッパ及び世
界での言語行動力育成を目指して—ドイツ、NRWの
外国語教育政策」

司会 河原俊昭(京都光華大学)

通訳 桂木忍(関西学院千里国際学園高等部)

14:30 ~ 17:30 シンポジウム(1)

「『複言語主義教育』とその政策—日本における展望」
パネリスト 森住 衛(英語、桜美林大学、大学英
語教育学会前会長)、山崎吉朗(フランス語、日本
私学教育研究所)、山崎直樹(中国語、関西大学)、
文部科学省関係者(予定)

レスポネント 任喜久子(イム・ヒグジャ)(韓国
朝鮮語、英語、大阪府立阪南高等学校)

Henny Rönneper 通訳 テーヤ・オストハイダ(関
西学院大学)

司会・コメント 橋内 武(英語、桃山学院大学)、
杉谷眞佐子(ドイツ語、関西大学)

18:00 ~ 19:30 懇親会 レストラン「チルコロ」(新
関西大会会館南棟 4階) 会費 3,500円

6月20日(日) 9:00 ~ 受付開始

【岩崎記念館2~4階】

10:00 ~ 12:00 一般発表

【CALL教室1】

司会 杉野俊子(防衛大学校)

言語政策課題としての情報保障—援助論からみた
「LL本」運動— かどやひでのり(津山高専)
日本の観光政策における言語の位置付けについて

山川和彦(麗澤大学)

人名の表記をめぐって

渡邊則子(ニューヨーク市立パルク大学)

「英語力の国際比較」言説の計量社会的検討

寺沢拓敬(東京大学大学院生)

【CALL教室2】

司会 矢頭典枝(神田外語大学)

言語政策における「領域性の原理」の優位性について：
ベルギーのフランデレンを事例に

石部尚登(東京外国語大学グローバルCOE研究員)

政権交代に伴う公立学校における少数言語教育の混
乱—スペイン・ガリシア自治州における聞き取り調
査から— 柿原武史(大分大学)

チェンマイにおける仏英独日中の対外言語普及について
山口雅代(大阪府立大学・非常勤)

【多目的ホール1】

司会 松田陽子(兵庫県立大学)

外国人市民への情報提供システムの構築：大阪府八
尾市の例から 河原俊昭(京都光華女子大学)

「日本語」のもう一つの自画像—「地域日本語活動」
の実態とその課題— 許之威(京都大学大学院)

減災のための「やさしい日本語」の特徴と「やさし
い日本語」作成支援システム開発

水野義道(京都工芸繊維大学)、御園生保子(東京農
工大学)、前田理佳子(大東文化大学)、鹿嶋彰(弘
前大学)、伊藤彰則(東北大学)、米田正人(前国立
国語研究所)、佐藤和之(弘前大学)

【多目的ホール2】

パネル発表 「子どものことばの力を考慮に入れた言
語教育政策提言のための基礎研究—日本語母語児童
と非母語話者児童の日本語力・母語力の評価テスト
—〈中間報告〉」

真嶋潤子(大阪大学)、友沢昭江(桃山学院大学)、
大阪府小学校教諭、朴錦花(大阪大学大学院生)

ポスター発表(岩崎記念館 1階ホール)

漢字圏出身者向けの言語サービスとしての新たな「や
さしい日本語」—漢字で表記される語彙に注目した
試案— ウー・ワイシェン(大阪大学大学院生)

【尚文館1階 マルチメディア大教室】

13:00 ~ 13:30 総会

13:30 ~ 14:30 基調講演 山田 泉(法政大学)

「外国人の定住と言語教育—年少者教育を中心に」

司会：真嶋潤子(大阪大学)

14:30 ~ 17:00 シンポジウム(2)

「外国人の定住と年少者の言語教育政策」

パネリスト 小島祥美(愛知淑徳大学)、ヴィヴィア
ン・ブッシンゲル・カバリ(神戸大学大学院協力
研究員)、安野勝美(大阪府教育センター教育企画
部 人権教育研究会 主任指導主事)

レスポネント 山田 泉(法政大学)

司会・コメント 真嶋潤子(大阪大学)、友沢昭江(桃
山学院大学)

閉会の辞 橋 好碩(國學院大學、日本言語政策学
会副会長)

2010年5月1日発行

発行者 日本言語政策学会

(会報担当 高民定 細谷美代子)

事務局 〒277-8686 千葉県柏市光が丘2-1-1

麗澤大学外国語学部 山川和彦研究室

Tel:04-7173-3427

E-mail: jalp.waseda.staff@gmail.com

学会 HP: <http://homepage2.nifty.com/JALP/>